

## 山刀伐峠

偉大な俳人、松尾芭蕉（1644～1694年）は、江戸（現在の東京）から本州の東北地方まで、156日間で約2,400キロメートルを旅しました。芭蕉は、弟子の河合曾良（1649～1710年）とともに、ほとんどの道のを歩いて旅しました。この時の旅は、詩と散文による旅行記「おくのほそ道」（北の奥地への狭い道）の題材となりました。旅の途中で2人は尾花沢に立ち寄り、10泊しました。

芭蕉と曾良は、山刀伐峠を通過して尾花沢にたどり着きました。山刀伐峠には、近くにある最上という町から通じる、急で曲がりくねった山道があります。この手入れされず荒れた道の長さはわずか3.8キロメートルでしたが、ブナが生い茂る古い森の中を曲がりくねって進んでおり、標高470メートルまで登る道でした。芭蕉は、この昼でも暗く寂しい森について記しており、この旅がかなり大変だったことがうかがえます。

芭蕉がたどった道は後世のために保存されており、彼が遺したものを記念して毎年この道を歩く催しが行われています。山刀伐峠を通る道は、1932年に舗装されました。そのため、訪れる人は、山に登る途中の駐車場まで車で行き、そこから徒歩で山道を頂上まで登ることができます。この道は、子宝地蔵をまつた小さなお堂を通ります。子宝地蔵とは、子どもを守る仏さまです。このお堂は、「子持ち杉」と呼ばれる幹に大きな穴が開いた聖なる杉の木となりにあります。お堂を過ぎたところにある開けた場所には、芭蕉と関連のある山刀伐峠にささげられた石碑があります。